

第25号
(通巻第69号)
令和2年3月

特別支援教育 ほっかいどう

Journal of Special Needs Education in HOKKAIDO



特集

スポーツを通じた障がい者の自立と
社会参加の充実に向けて

～2020年オリンピック・パラリンピック開催を契機として～

北海道立特別支援教育センター

特別支援教育ほっかいどう (通巻第69号)

特集

スポーツを通じた障がい者の自立と社会参加の充実にむけて
～2020 オリンピック・パラリンピック開催を契機として～

特別寄稿

スポーツを通じた自立と社会参加の充実にむけて

北海道教育庁教育指導監 上 林 宏 文

特集1 (インタビュー)

現役選手とその家族、関係者から
夢の実現に向けて～選手の思い、指導者の思い～
○パラサイクリング選手

北海道札幌視覚支援学校高等部普通科2年 山 口 乃 愛

夢の実現に向けて～選手の思い、保護者の思い～
○リオデジャネイロパラリンピック選手日本代表(競泳)
あいおいニッセイ同和損保株式会社所属
北海道札幌高等養護学校卒業生

宮 崎 哲

特集2 (寄稿)

生涯にわたるスポーツライフの実現を図るために
～「未来のオリパラ・スペオリアスリートプロジェクト」の取組～

北海道鷹栖養護学校長 原 田 稔

特集3 (寄稿)

地域のプロスポーツクラブと一体となったパラスポーツの推進

NPO法人セカンドサポート理事長 芳 賀 博 信
(ブライндサッカーチーム「ナマ-ラ北海道」、元北海道コンサドーレ札幌主将)

特集4 (寄稿)

アダプテッド・スポーツの更なる普及を目指して

北海道教育大学岩見沢校准教授
アダプテッド・スポーツ研究室 大 山 祐 太

巻末言

共生社会の実現を目指して

北海道立特別支援教育センター所長 小 原 直 哉



スポーツを通じた自立と社会参加の充実に向けて

北海道教育庁教育指導監 上 林 宏 文

1 はじめに

本年7月から9月にかけて、東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。マラソンと競歩が札幌で行われることになり、本道においても、大会への期待が大きく膨らんでいます。パラリンピックについては、障がいのある選手たちの想像を超えるパフォーマンスを目にすることなどを通して、すべての人がお互いを尊重し認め合う共生社会の実現に向けた契機となることを期待しています。

昨年9月に室蘭市で開催された特別支援教育関係PTA等の合同大会において、ウィルチェアラグビー日本代表の池崎大輔選手の講演をお聴きする機会がありました。「岩見沢高等養護学校在学中に車いすバスケットボールを始め（部活動）、卒業後ウィルチェアラグビーと出会ったことで自分の夢が広がり、その夢の実現に向けてたゆまぬ努力を続けてきました。」とのお話から、池崎選手の向上心の強さとともに、障がいのある子供たちの成長にとって、スポーツがもつ大きな可能性を改めて感じました。

2 障がいのある子供たちとスポーツ

(1) 学校教育におけるスポーツの位置付け

障がいのある子供たちのほとんどは、学校生活の中で、主に「体育」の授業を通して、いろいろなスポーツに出会います。特別支援学校では、子供たちの実態に応じて、陸上運動や水泳運動（プール学習）、ボール運動（サッカー等）などが行われています。

新学習指導要領では、体育の教科の目標が改善され、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目指すこと」が示されています（障がいのある子供も障がいのない子供もほぼ共通）。このように、スポーツの教育的価値が明確に位置付けられたことを踏まえ、今後、「体育」の授業はもとより、部活動などの充実を図っていくことが求められています。

(2) 障がいの特性等に応じた体育の授業等の工夫

子供たちがスポーツに親しむようになるためには、体育の授業等を通して、スポーツに関心を持ち、スポーツに取り組むことが好きになることが大切であると考えます。しかし、障がいのある子供たちの場合、一般に行われているスポーツの競技をそのまま適用しても、自分の力を十分に発揮できずにマイナスの感情を抱かせる可能性が高いと思います。このため、特別支援学校では、障がいの特性等に応じたスポーツの工夫が行われており、表1にその例を示しました。

表1 道立特別支援学校の体育の授業等における障がいの特性等に応じたスポーツの例

障がい種別	主なスポーツの競技等
視覚障がい	・ゴールボール（パラリンピック競技） ・サウンドテーブルテニス（音の出るボール等を使用し、ネットの下にボールを転がして行う） ・クライミング（体育館に設置したクライミングウォールを登る競技）
肢体不自由	・ボッチャ（パラリンピック競技） ・ゴロ野球（各自に合わせてボールの打ち方を変えるなど、個別ルールを適用して行う）
病弱	・スティックスポーツ（電動車いすを操作しながら、各自に合わせてスティックを使用して床上のボール等を動かし、サッカーなどの競技を行う）

※ 聴覚障がい特別支援学校では視覚情報によるルール等の説明や競技中のコミュニケーションへの配慮、知的障がい特別支援学校では実態に応じたルールや道具等の工夫などを実施

＜特別寄稿＞スポーツを通じた自立と社会参加の充実に向けて

肢体不自由教育校で行われている「ゴロ野球」は、札幌圏の学校で長く取り組まれており、体育の授業以外でも、各校のチームのほか、卒業生や社会人のチームもあり、年2回の大会が開催されています。病弱教育校で行われている「スティックスports」は、八雲養護学校で開発されたもので、子供たちは、このスポーツを通して自己肯定感を高め、余暇活動としても取り組んでいます。このように、体育の授業での工夫がきっかけとなって授業以外での取組に発展することは、豊かなスポーツライフの実現につながるものであり、今後、普及が期待される「ゴールボール」や「ボッチャ」などのパラリンピック競技も含め、取組の充実を図っていく必要があると考えます。

また、函館盲学校では、中学部体育科武道で、地域の協力を得て「弓道」に取り組んでいます。視覚に障がいのある生徒にとって弓道は難しいと思われませんが、的が動かないことや一連の作法が分かりやすいこと、的に当たったことによる達成感などから、生徒の向上心や自信を育てています（月刊「武道」2019年9月号）。

こうした新たな発想で可能性を広げる取組も大切なことと思います。

(3) 自主性・主体性を育む運動部活動等の取組

学校の運動部活動は、体力や技能の向上のほか、異年齢者との交流の中で生徒同士や生徒と教師等との好ましい人間関係の構築が図られ、学習意欲の向上や自己肯定感、責任感、連帯感を高めるなど、教育的な意義が大きく、何よりも子供たちが自主的・主体的にスポーツに取り組む態度を育てることにつながります。

道立特別支援学校では、今年度、運動系と文化系を合わせて、中学部5校で13部、高等部23校で117部の部活動が設置されている状況にあります。このうち運動部活動の例を表2に示しました。各学校では、障がいの特性や生徒の希望等を踏まえて部を設置し、参加する生徒たちが目標をもって努力するよう取り組んでいます。

また、日ごろの練習の成果を発揮する機会として、保護者や地域の協力により、障がい者スポーツ大会などの各種大会への参加にも取り組んでおり、今後も、こうした機会を広げていく必要があると考えます。

表2 道立特別支援学校における運動部活動の例

障がい種別	主な部活動の名称等
視覚障がい	・スポーツサークル(ゴールボール、サウンドテーブルテニス、フロアバレー等)
聴覚障がい	・陸上部 ・サッカー部 ・バドミントン部
知的障がい	・陸上部 ・サッカー部(フットサルを含む) ・ソフトボール部 ・卓球部 ・ダンス部 ・マラソン同好会 ・バスケットボール部 ・バドミントン部 ・スポーツチャンバラ部
肢体不自由 病弱	・車いすバスケットボール部 ・スポーツチャレンジ部(サッカー、卓球、バドミントン等) ・のびのびクラブ(各自の課題に応じた活動)

3 生涯にわたってスポーツに親しむために

(1) 障がいのある方の生涯学習の推進

障がいのある子供たちが、学校卒業後もスポーツに親しむためには、共生社会の実現についての社会全体の理解とスポーツ活動に参加できる環境整備が求められます。

文部科学省では、平成31年3月に「障害者の生涯学習の推進方策について(報告)」を公表し、目指す社会像として「誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会」を掲げ、生涯学習の推進方策として、①学校卒業後における障害者の学びの場づくり、②障害の有無にかかわらず共に学ぶ場づくり、③障害に関する理解促進、④障害者の学びを推進するための基盤の整備、を示しました。

本報告の中の学校卒業後の学習活動に関する本人アンケートの調査結果では、「健康の維持・増進、スポーツ活動」の学習経験が30.3%となっており、今後、国の推進方策に基づき、関係機関等との連携の

＜特別寄稿＞スポーツを通じた自立と社会参加の充実に向けて

と、「スポーツを続けたい、参加したい、学びたい。」という本人のニーズに対応できる環境を整えていく必要があると考えます。

(2) 特別支援学校や関係機関等の取組への期待

本報告では、特別支援学校に期待される取組として、①生涯学習への意欲を高める指導や社会教育との連携を図った教育活動の推進、②心のバリアフリー学習等を通じた障害に関する理解促進、③生徒の進路先の企業や福祉施設等と連携した個別の教育支援計画の適切な引継ぎ、が示されています。

スポーツ活動の観点から、①については、卒業後もスポーツを続けている先輩との交流や地域の社会教育施設等でのプログラムへの参加促進を図ること、②については、地域の小・中学校等との交流及び共同学習等において、例えばボッチャの競技を一緒に体験することを通して理解促進を図ること、③については、生徒のスポーツ活動の取組や継続の意志を個別の教育支援計画を通して進路先に適切に引き継ぐこと、などが考えられます。

私は、子供たちが自分の好きなスポーツを見つけ学校卒業後も続けていくためには、様々なスポーツを体験する機会、一緒に活動する仲間や応援してくれる人たちとの出会い、ロールモデルの存在、各種大会等への参加を通して得られる貴重な体験、本人の強い意志、家族の協力、学校と進路先等との連携、職場等の理解、地域からの支援などが必要であり、中でも「本人の強い意志」が重要と考えています。在学中は先生方からの働き掛けや支援がありますが、卒業後の環境では多くの場合、自分から参加したいという強い意志を周囲に表現することで支援が得られると考えるからです。

国際パラリンピック委員会（ICP）は、パラリンピアンに秘められた力こそが、パラリンピックの象徴であるとし、「勇気」「強い意志」「インスピレーション（人の心を揺さぶり駆りたてる力）」「公平」の四つの価値を重視しています。子供たちが、東京パラリンピックを通してパラリンピアン「強い意志」を感じ取り、生涯にわたってスポーツに親しむために、自分の意志を一層強く表現するようになることを期待しています。

4 おわりに

先月、静岡県藤枝市で開催された「第5回北海道全国知的障害特別支援学校高等部サッカー選手権（もうひとつの高校選手権2019）」に、本道を代表して北海道新篠津高等養護学校のサッカー部が初めて参加しました。トーナメントの初戦で惜しくもPK戦で敗れはしたものの、参加した生徒の皆さんから「チームで団結していけば来年も全国に行くことができると思う。（1年生）」、「もっと練習してもっと強くなって今回優勝した学校と対戦したい。（2年生）」、「卒業後もサッカーを続けていきたい。本当によい思い出になりました。（3年生）」などの声が私に寄せられました。日頃の部活動での練習の成果を発揮し、チーム一丸となって全力でプレーしたことで、生徒一人一人の今後につながる貴重な経験となったことと思います。

障がいのある子供たちがスポーツと出会い、自分に合ったスポーツに目標をもって取り組み続けることを通して、難しくても乗り越えようとする強い意志が育ち、その思いに共感した人たちとつながって夢を実現していくことは、自立と社会参加の一つの姿であると考えます。子供たちが豊かなスポーツライフを送ることができるよう、幅広い方々の理解と協力のもと、必要な取組を今後とも進めてまいりたいと考えています。



夢の実現に向けて～選手の思い、指導者の思い～

パラサイクリング選手 山口 乃 愛
(北海道札幌視覚支援学校高等部普通科2年生)

1 パラサイクリングとの出会い

——パラサイクリングを始めたきっかけを教えてください。

スポーツをすることが好きな私でしたが、中学部2年生のとき、グランドソフトボールの全国大会が終わってしまうと、グランドソフトボールに取り組むことや部活動がなくなってしまい、何もすることがなくなりました。私自身「何しようかな～」と思っていたときに、先生からパラサイクリングというのがあって、「今度、パラサイクリングの体験会があるので来てみませんか」という誘いをもらいました。その体験会に行ったというのがきっかけです。そのとき、「パラリンピックに出場するには、競技人口も少ないし狙い目だよ」ということを先生から聞きました。

(中西先生) 私ともう一人、(山口さんを) 誘った先生が部活動の顧問をしまして、山口さんが、陸上競技で、すずらんピックなどに出場しているのも知っていました。グランドソフトボールが終わり、何もしていないのはもったいないと思っていました。そのとき、学校で行うパラサイクリングの体験会に、何人かの生徒にも声を掛け、来てもらいました。

——パラサイクリングを勧められたときは、どんな気持ちでしたか。

率直に、パラリンピックに出られるならやろうかなと思いました。パラリンピックに出たいという思いが芽生えました。

その後、1年くらいパラサイクリングのトレーニングをしていたのですが、そのときに、「ゴールボールで強化選手になりませんか」という誘いがありました。また、同じ時期に、「パラサイクリングの強化選手になりませんか」という誘いもありました。

私は、ゴールボールはメジャーですし、競技人口も多いですから、パラサイクリングを選びました。とても悩みましたが、パラサイクリングを選んだ方が、パラリンピックに出るための近道だと考えました。

(中西先生) 私自身もパラリンピックに出場したいと思っていましたが、その夢は叶わなかったの
で、現在は、パラリンピアンを育てたいという気持ちが強いですね。

2 パラサイクリングの魅力

——パラサイクリングを体験して、実際に「やってみよう」と思ったのはなぜですか。

私は、一人では、自転車が乗れないというか、乗らせてもらえなかったので、体験会で自転車に乗ったときに「面白いな」と思いました。

＜特集1＞現役選手とその家族、関係者から

——辛い練習があっても、東京パラリンピックを目指し続けられる理由は何ですか。

競技に取り組んでいる私としては、今まで乗れなかった自転車に乗れるということもありますが、例えば、（過去に出場した）伊豆のロードレースでは、富士山が見えたり、山頂まで登って降りてくるときの景色を見ることができたりするなど、楽しいことがたくさんあります。

——自転車に乗っているとき、周りの景色を見たり感じたりする余裕があるのですね。

本当は、見たらだめなのかもしれませんが、私は、ハンドルの操作をしないので、いくらでも景色を見ることができます。とにかく足を動かしていればいいのです。もちろん、登りは余裕がありませんが、平坦な所では、周りの様子を見ることができます。あと、相手の方と話をしていることも多いです。

——競技を見ている方に、こんなところを見てほしいなどのポイントはありますか。

自転車にはいろいろな種類があることを知ってもらいたいです。タンデムは2人乗りですが、三輪の自転車や手でこぐハンドバイクなどもあります。タンデムでしたら、選手同士のあうんの呼吸です。「ダンシング（立ちこぎ）」するときに、合図がなくても、パッと立ち上がってこぎ始めるのを近くで見たときは、「すごい！」と思うはずです。ハンドバイクは手だけで坂を登っていくので、本当にすごいです。片足の選手もいて、バランスを取るだけでも大変だと思うのに、私以上の速いタイムで走ることも、すごいと思います。



質問に答える山口選手

競技を観戦している方は、普通のロードレースだと、速さや順位に注目すると思いますが、パラサイクリングの場合は、「何で、手でこげるの？」などといった魅力にも注目してほしいです。

3 東京パラリンピックに向けて

——パラリンピックが日本で開催されることについて、どのように捉えていますか。

私が競技に取り組んでいる年代で、東京でパラリンピックが開催されるということは、すごい奇跡だと思っています。自分が選手でいる間に、このような機会は2度とないと思います。開催地が東京とその他の都市では、全然、注目度が違うと思っています。だから「是非出たい」という思いも強いですし、東京で開催されることにすごく価値があると私自身が感じています。

——なぜ、東京で開催されることにすごく価値があると感じたのですか。

何でだろうな…。でも、日本人として日本で開催される大会に参加するだけで、無条件で応援してくれると思うのです。以前に、韓国でトラック競技の大会に参加したとき、日本人に対する声援はあまりなかったのですが、地元である韓国の選手に対する応援はすごかったです。選手としては、応援してくれた方が、やる気が出たり、頑張れたりするので、日本での開催で、選手として出たら、どんな感じなのかイメージしています。自国の選手として出場できることが、私自身「すごいなー」と思っています。

＜特集1＞現役選手とその家族、関係者から

——山口選手自身は、目標の実現に向けて努力を惜しまない性格ですか。

そのことについては、私自身も謎なのですが、本当は自分に甘いです。どちらかと言えば、楽をして勝ちたいと思っています。ただ、グラウンドソフトボールをしていたときは、夏休み中、毎日素振りをするなど、好きだったらいくらでも努力できる性格です。

——本気になるために、自分自身を追い込んだり、練習に向き合ったりするための工夫やしていることはありますか。

以前は、一緒に取り組んでいた友達がいましたので、その友達に絶対負けないという思いでいましたが、現在は、筋肉が落ちていくのが怖いというか、筋肉が落ちている状態を、タンデムの相手の方に見せるのが申し訳ないと思うようになっていました。以前、相手の方から「ちゃんと練習していた？」と言われていたことがあって、私のために色々教えてくれているのに、すごく申し訳ないと思ったことを覚えています。それとは逆に、トレーニングなどを続けていることで、安心できるということもあります。

4 東京パラリンピックの先に

——東京パラリンピックのその先のことや、将来の夢など、少し遠い未来について、どのような姿になっていきたいか、理想やイメージがあれば教えてください。

私の目標は、チームメイトと一緒に自転車をやることです。そのためには、先生がいる前で言うのは、恥ずかしいのですが、大学受験に合格することです。志望する大学は、自転車の強豪大学なので、その大学で4年間打ち込めば、次に、パリで開催されるパラリンピックに出場できると思いますし、私自身も出場したいと考えています。

その大学は、今、タンデムで私と組んでいる選手の出身大学でもあり、私としては、大学に行く気がなかったのですが、色々教えてもらうなかで、大学に行ってみたいと思うようになりました。



真剣な表情で語る山口選手

——さらに、その先の夢や目標はありますか。

就職です。札幌市の職員になりたいと思っています。理由は、2030年の冬季オリンピックの候補地として、札幌市がこれから誘致することを踏まえて、もし、札幌での開催が実現したら、選手としてではなく運営する側として携わりたいと考えています。これは、すごくやりがいがあることだと思っています。

——最後に、これからパラリンピアンを目指したいなと考えている小学生や中学生に向けて、アドバイスやメッセージをお願いします。

以前、「チャンスは、いろいろな所に転がっているけれど、つかみ取るのは自分である」というような話を聞いたことがあります。チャンスがあったとしても、自分で動かなければ、チャンスは自分の所にやっこないと思っています。だから、何かしたいと思ったら、自分で動くということが大事だと思っています。私の場合、パラサイクリングの体験会に参加したり、強化選手になろうと決めたりしたのも自分でした。そのような状況になったとき、迷ってしまうことがあると思いますが、大きな決断をしなければならぬこともあると思いますが、勝負してみることも必要だと考

<特集1>現役選手とその家族、関係者から

えています。年齢が若いうちは、何でもできるとよく言われますし、失敗してもやり直せるからとも言われるので、例えば、やっている競技が、「違うな」と思ったら、いくらでも転向すればよいと思います。結論としては、「動く！」ということが大事だと思います。

5 スポーツを通じた社会参加について

——いつも指導している中西先生に伺います。山口選手に対して、学校として配慮していることはありますか。

(中西先生) 長期休業中などに、練習できる時間を確保できるようにしています。また、放課後の時間は、生徒会活動などがあるので、終了後に「練習したほうがいいよ」と声を掛けています。

——中西先生が山口選手をサポートしていて、嬉しいと感じるのは、どのようなことですか。

(中西先生) やりたいと思っていることを続けられることは、その人にとってプラスでしかないと思います。そのことをサポートできるのは、本当に嬉しいことです。

——中西先生は、パラスポーツなどを通して、社会に参加する意義や価値をどのように捉えていますか。



山口選手と中西先生

(中西先生) 私は、スポーツを通して、自己実現を図ることが出来ることが良いと思っています。選手本人は、あまり感じていないと思いますが、周りの人は、その姿にメッセージを感じたり、障がいのある方の理解が進んだりすることになると思うのです。結果として、障がいのある方が自己実現をすることが意味のあることであり、周りの方がどのように受け止めるのかは、2次的、3次的なことだと考えます。

山口さんは、そういった意味でも、ちょうど自己実現を図ることや、周りの方へ自分の頑張りを感じてもらえる時期です。そういう時期に、多くの経験ができることも大切ですが、時期に関係なく、これからもパラスポーツを通して、自己実現を図ることは、これからの生き方に大きな影響を与える、もしくは、意義が大きいと思っています。

——中西先生の話聞いて、山口さんから一言いただいて終わりたいと思います。

当然のことですが、いろいろな方に応援してもらっていますので、その恩をあだで返さないというか、裏切ることはないように頑張りたいと思います。

——これから私たちも、山口さんのことを応援していきますので、頑張ってください。
本日は、ありがとうございました。



夢の実現に向けて～選手の思い、保護者の思い～

リオデジャネイロパラリンピック日本代表（競泳）宮崎 哲
（あいおいニッセイ同和損保株式会社所属）
（北海道札幌高等養護学校卒業生）

1 水泳のとの出会い、そして魅力

—水泳を始めたきっかけを教えてください。

体を動かしたいということで、母の勧めで泳ぎ始めました。小さな頃の話なので、記憶はありませんが、6か月からベビースイミングを始めていたようです。

—途中で水泳を辞めたいと思うことはなかったのですか。

実は、嫌になったときもありました。水泳に行きたくないとか、辞めたいと思っていたときもありました。

—でも、今こうやって水泳を続けているというのは、水泳の魅力があるからだと思うのですが、宮崎選手が考える水泳の魅力というのを教えてください。

水泳の魅力は、「記録に挑戦できる」こと、「自分との戦いと挑戦」、最後は「世代との戦い」です。

今、日本の水泳のレベルが、一気に上がっているのので、日本代表に選ばれるのは、厳しい状況です。

（母親）今、息子は、27歳です。現在は、若い選手が増えていて、知的障がい者の記録がどんどん塗り替えられている状況です。今、水泳の日本の知的障がいの男子は、世界でもトップクラスの実力があります。世界記録を持っている選手が2人もいます。それが、「世代との戦い」ということです。



インタビューに答える宮崎選手

—魅力の中の2番目に、自分との戦いとありますが、具体的にどういうことか教えてください。

自分のベストパフォーマンスを出せるかということです。

—苦しいときに、もうダメだというふうに思っても、もう少し頑張ろうといった、自分との戦いですか。

（母親）そういうのもあります。やっぱり情緒のこともあるので、体のことと情緒のことがかみ合うとベストパフォーマンスが出ます。情緒が原因で、良いパフォーマンスが出ないこともあります。今日は、何で良い記録出たのかなと考え、それと同じことをやってみようしても、だめなこともあります。何で、そういうふうになっているのか、理由が分からない。そこは未知です。でも、それが息子のもっている障がいということであり、本当に、複雑に、色々と絡んでいると思います。

＜特集1＞現役選手とその家族、関係者から

——記録への挑戦というのがありました、最近の大会では、素晴らしい記録が出ていました。

去年から、200メートルのバタフライに取り組んだのですが、着々と記録が伸びていき、世界記録を突破したこともありました。一緒に出場した日本人の選手も世界記録を出したので、結果は2位でしたが、強化指定選手に残ることができました。

——新しい種目にチャレンジするときに、不安はないですか。

不安はあります。うまくいくかどうかとか、粘れるのかといった不安です。ただ、去年の大会では、予定変更やメンバーの交代があった中で、それに対応していきましし、最近では、大きなレースに毎回参加していて、それにも耐えることができているので、鍛えられていると思います。

2 働きながら水泳を続けるという選択

——少し視点を変えて、お仕事のことについて教えてください。

会議用の資料のコピーやデータ入力の仕事をしています。

（母親）会議資料のコピー作業などは、特別支援教育センターで臨時主事をやっていたときの仕事と同じ仕事です。特別支援教育センターでは、仕事の基本を学ばせていただいたと思っています。現在働いている会社は、大きな会社なので、指示が全部メールであることには驚きましたが、周囲の方が、根気よく教えてくださいました。困ったときは、困っているということ、担当の人に伝えることで、助けてもらっています。

現在の会社には、アスナビさんの紹介で、入りました。アスナビというのは、日本オリンピック委員会の組織で、企業と現役アスリートをマッチングする就職支援制度です。アスナビには、競技と仕事を両立するという理念があります。北海道で競技を続けるというのは、大会がほとんど本州で開催されるため、費用的には、厳しいことがありますが、活動費の一部を補助してくれるため、色々と助けられています。トップ選手が終わった後は、そのまま正社員で働かせていただけるという、そういう話をいただいています。

——宮崎選手が水泳選手として活動を続けていくことを、会社は応援してくれているんですね。

今年は、パラリンピック開催の年ですが、職場の人からは、どのような声を掛けられますか。

会社の皆さんは、私の障がいを理解していますので、いつも応援してくれています。遠征する前には、必ず決意表明を行っています。そして、大会や遠征が終わった後にも、報告をしています。あいおい損保は、全国に支店があり、「障がい者スポーツを応援しよう」という会社のスローガンがあるので、大会が開催される会場で、その支店の皆さんが応援に来てくれます。そういうことで、応援してもらっているということを感じています。

——いろいろな会場で、あいおい損保の皆さんから応援される様子を目の当たりにして、宮崎選手は何か感じることはありませんか。

応援してくれる気持ちに、とても感謝しています。ですので、大会では、自分の種目が終わったら、応援に来てくれた支店の皆様に挨拶をしにっています。

＜特集1＞現役選手とその家族、関係者から

（母親）応援に来てくださった社員の皆様に挨拶をしにいくというのは、障がいに対する理解をしていただくという意味もあります。見た目では分からない障がいなので、そういう部分も皆さんに分かってもらいたいと考えています。何回もそのような機会をいただき、回を重ねるごとに、上手に話せるようになってきています。そのような点からも、育てていただいているということを感じています。

——単に競技を行うだけではないということについて、もう少し教えてください。

（母親）今まで（学生時代まで）は、同じ大会に出場している水泳の仲間が応援してくれるというのではありませんが、自分たちの以外の人というか、全く知らない人たちに応援されるというのが初めてで、そのような人たちの応援というのは、すごい力になるんだということを感じています。そういうことがあるので、感謝の気持ちは、毎回伝えていかななくてはならないのだと思っています。結果が良くても悪くても、皆さんに伝えていく、お礼をするというのは、続けていかななくてはならないですし、感謝を忘れてはいけなと思っています。



母親と宮崎選手

3 東京でのパラリンピック開催に向けて

——さて、今年は、東京でパラリンピックが開催されますが、そのことを自身では、どのように捉えていますか。

まだ、実感はわかりませんが、いよいよ開催されるということは、捉えています。

——現段階では、日本代表に選ばれるかどうかは分からないということですが、日本代表に選ばれた際の目標を教えてください。

決勝進出が目標です。リオデジャネイロパラリンピックのときは、予選10位だったので、決勝に出場することができませんでした。今回の東京では、必ず決勝へ進みたいと考えています。

——水泳について、今後こういうふうにしていきたいというのはありますか。

今は、働きながら水泳を長く続けていきたいと考えています。競技でなくても、ずっと現役で泳ぎ続けていきたいというふうに考えています。



インタビューの様子

——水泳だけでなく、生活も含めた将来の目標について、どのように考えているか教えてください。

別のスポーツにも、チャレンジしたいと考えています。また、スポーツだけではなくて、自分で自立できるように「修行」していきたいと考えています。

＜特集1＞現役選手とその家族、関係者から

4 保護者の思い

——息子さんが水泳を続けるに当たって、大切にしていることを、教えてください。

（母親）本人の好きなことを、とことんやらせようと思っています。本人が、水泳を好きなのかどうかは分かりませんが、サッカーや陸上があった中で、水泳をチョイスして続けています。本人が嫌だと言うまでやらせてみようと思っています。

夫は、特別なことをしてきたという思いは、全くありません。ただ、大会があれば大会に出るというように、チャンスをつかみにいくようにということしか言っていません。ただ、チャンスは1回しかありません。その「チャンスの女神の前髪」をつかめるかどうかということです。それを息子が、たまたま、つかんできたことを、細く長くというよりは、短く太くという思いで、これまで家族で応援してきました。

親にしてみたら、リオのパラリンピックに行ってきたのですが、あの歓声の中で行われたことが、東京でもあるのだと思うと、そのような中で泳がせたいなあとは思いますが、すごい歓声と地響きで、本当に建物が揺れるのです。しかし、何よりも、障がい者に対する温かさを感じました。それが東京でもあるのだと思うと、泳いでほしいなあと思います。

——最後に、スポーツを通じた社会参加ということについて、お考えをお聞かせください。

（母親）彼が社会参加することで、小さなコミュニティの中ではありますが、障がいに対する理解が深まってきて、ありがたいと思っています。息子が経験してきたことが、外に発信されているので、それを次の人たちに渡していくことが大事だなというふうに捉えています。直接伝えなくても、がんばっていることで伝わっていくこともあると思います。

目に見えない障がいであるからこそ、障がい理解につながってくれたらよい、頑張っていることで、知らず知らずに周囲の人に伝わっているということもあると思っています。

——今日は、インタビューのために、時間を割いていただきありがとうございました。

こちらこそ、ありがとうございました。

（母親）このようなインタビューは、本人は、聞かれても、きちんと答えられないことがあるかもしれませんが、ただ、このような機会に、自分の考えを、言葉で整理することを通して、本人の言葉の引き出しが増えていっているという側面があります。そのような成長があったのも、社会のおかげだと思っています。

社会人として生活する中で、多くの方と接して、お話しする機会をもらう。そのことを通して、言葉で整理する。そして、それをまた引き出す。その繰り返し、積み重ねになっていると感じています。こちらこそ、このような機会をいただき、ありがとうございました。



生涯にわたるスポーツライフの実現を図るために ～「未来のオリパラ・スペオリアスリートプロジェクト」～

北海道鷹栖養護学校長 原 田 稔

1 はじめに

本校は、知的障がいのある児童生徒が学ぶ特別支援学校であり、小学部、中学部、高等部の3学部そろった学校です。本校の卒業生は、そのほとんどが進路先として、生活介護となっています。

卒業生の保護者の皆さんとお会いすると「学校にいたときは運動していたけど、今はしなくなった」、「動くことが少ないせいか、子供が太ってきた」、「外に出たがらなくなり、体力も落ちてきた」などのお話をよく耳にします。そのことを聞いているためか、在校の保護者の方の中には、水泳や登山をさせたり、スペシャルオリンピックス（知的障がい者のオリンピックと呼ばれています）の種目に挑戦させたりする方もいらっしゃいます。一方、学校では、『体育』や『体力づくり』などの時間で身体を動かしてはいますが、児童生徒が意欲的に取り組んでいるかということと必ずしもそうとは言えないところがあります。

在学中はいいとしても、卒業後も自らスポーツや運動をしたり、運動に誘われたときに臆せず仲間に入っていったりするようになるためには、身体を動かすことが気持ちいいと思えることや運動することが楽しいと思えることがとても大事なように思います。

2 プロジェクトの立ち上げ

学校として、児童生徒に身体を動かすことへの意欲をもたせ、身体を動かすことが“楽しい”と思ってもらえる授業を行っていく必要があると考えました。“楽しい”という気持ちが卒業後も続いていけば、自らスポーツや運動をしたり、運動に誘われたときに臆せず仲間に入っていったりすることにつながるのではないかと考えています。折しもオリンピックとパラリンピックが2020年東京で行われます。決してアスリートを育てることを目標とするわけではありませんが、未来の目標に“アスリート”を掲げ、オリンピック・パラリンピックが東京で開かれるということの一つのきっかけにして、学習意欲を喚起させていくプロジェクト「未来のオリパラ・スペオリアスリートプロジェクト」を立ち上げて、試行することにしました。

立ち上げるまでの経緯は、次のとおりです。

- ① 10月の職員会議で、2019年度の学校経営計画（案）に「未来のオリパラ・スペオリアスリートプロジェクト」を盛り込み、示しました。
- ② 学校経営案に対して教職員の皆さんから意見をもらい、1月の職員会議で、2019年度の学校経営計画が了承され、プロジェクト試行の準備を整えました。
- ③ 2月に校長を含めたプロジェクト準備委員会を発足し、2019年度の取組を計画し、2月の職員会議で示しました。
- ④ 4月に正式なプロジェクトチームを発足しました。

3 プロジェクトの取組

(1) プロジェクトチーム

構成員：校長、教頭、教務主任、各学部の『体育』や『体づくり』担当者の計9名

会議：年4回実施（時間がない場合は、スクールネットの電子会議システムを活用する）

＜特集2＞選手や競技を支える環境の充実

(2) 取組内容

- ア 東京2020教育プログラム「ようい、どん！」に参加しました。
- ・オリ・パラ東京大会のロゴやマスコットキャラクターの使用が可能になりました。
- イ 5月の全校朝会等で、児童生徒にオリンピック・パラリンピックについて話し、3つのレガシーについて説明しました。
- ・3つのレガシーについては、分かりやすい文言に替えて児童生徒に次のように説明しました。
 - ① 自信と勇気：失敗を恐れずチャレンジすること。
 - ② 多様性の理解：友だちや様々な人と助け合い支え合って生きること。
 - ③ 主体的、積極的な社会参画：地域や世界の活動に興味をもち、積極的に参加すること。
- ウ 6月の運動会、7月の高等部体育祭でオリンピック・パラリンピックのマスコットキャラクターや応援曲を取り入れた競技を実施し、気持ちを盛り上げました。
- エ 7月に外部講師を招き、教職員のボッチャ講習会を実施しました。夏休み中に再度研修を実施しました。
- オ 8月に、教育弘済会やスポーツ財団の助成事業に応募していたボッチャセットが届き、3セットそろいました。
- カ 9月の全校朝会で、パラリンピックについて児童生徒に説明しました。
- キ 2学期より、各学部単位でボッチャを取り入れた学習を始めました。
- ・児童生徒の実態に合わせて、ボッチャの競技を段階的に進めたり、ルールを一部変更したりしながら体育等の授業に取り組みました。
- ク オリピック・パラリンピックの関連事業に積極的に応募しました。
- ケ 1月に教職員が、視覚障がい者パラスポーツについて学び、レーザー銃の体験を行いました。



ボッチャ職員講習会



小学部ボッチャ授業



中学部ボッチャ授業



レーザーライフル職員体験

＜特集2＞選手や競技を支える環境の充実

(3) 取組の成果

2019年度の取組の成果については、次のことが挙げられます。

- ア 教職員が、障がい者スポーツに関心を抱くようになりました。
- イ ボッチャの職員研修により、ボッチャの楽しさを知ることができ、授業への反映がスムーズに行われるとともに、児童生徒に合った方法をより考えるようになりました。
- ウ 児童生徒がボッチャの授業を楽しんで参加しています。また、チーム戦では、チームとしての意識が高まり、積極的に応援をするようになりました。
- エ プロジェクトチームにすることで、フレキシブルにかつスピード感をもって様々な課題に対応し、構成員がとても積極的に取り組む姿が見られました。
- オ 鷹栖町から、2020年度5月のチャレンジ・デイにおいて、ボッチャによる町民との交流の提案を受けました。

4 今後に向けて

2019年度のプロジェクトの試行を受けて、2020年度からは、プロジェクトの本格実施となります。ボッチャもそうですが、他の障がい者スポーツなども取り入れて経験の幅を広げていきたいと考えています。

2020年度の取組として、次のようなことに取り組みたいと思っています。

- 5月のチャレンジ・デイで町民の方とボッチャをとおした運動による交流を図る。
- オリンピックやパラリンピックに関連するアスリートの話の聞いたり、一緒にスポーツ体験をしたりする。
- 校内でのボッチャ定着のために、学部や学校でボッチャ大会を開催する。
- ニュー・スポーツにチャレンジする。

今後も学校として、“運動が楽しい”という授業を展開し続け、児童生徒の将来に生きる学習を行っていきたいと考えています。また、学校で児童生徒が経験したスポーツや運動が、卒業後の運動の習慣や機会につながるように学校から地域へ発信できればと考えています。



地域のプロスポーツクラブと一体となったパラスポーツの推進

NPO法人セカンドサポート理事長 芳賀博信
(元北海道コンサドーレ札幌主将)

1 はじめに

私は、現在、NPO法人セカンドサポートの理事長として、北海道で唯一のブラインドサッカーチームである「ナマーラ北海道」の運営をしています。

平成24年（2012年）までは、サッカーJリーグの北海道コンサドーレ札幌に所属し、引退後の2014年に当法人を設立しました。当法人は、「①アスリートの引退後のセカンドキャリアのサポート、②様々なスポーツの振興、③ブラインドサッカーチームの運営」を活動の3本柱として掲げています。

2 ナマーラ北海道設立の経緯

現役を退き、サッカー教室で札幌市にある盲学校を訪問した際に、ブラインドサッカーをやりたいという男子生徒がいました。「じゃあやればいいじゃん！」と、彼に伝えたのですが、調べてみると、北海道には、ブラインドサッカーのチームは、一つもないという現状を知りました。プレーをする環境、場所を探しましたが、全くありませんでした。そこで、ないのなら、誰かが作らなければいけないという思いになり、ブラインドサッカーのチームを立ち上げることとなりました。



ブラインドサッカーチーム「ナマーラ北海道」

平成26年（2014年）7月に、「健常者と障がい者が共に支え合う社会の実現」の理念の下に、北海道や北海道教育委員会といった行政機関だけではなく、北海道コンサドーレ札幌はもちろんのこと、エスポラーダ北海道や、北海道日本ハムファイターズ、レバンガ北海道などの北海道のプロスポーツチームにも協力をいただき、北海道初となるブラインドサッカーチームである「ナマーラ北海道」が誕生しました。

チーム名に「北海道」を付けた理由は、北海道全体でこのブラインドサッカーチームを応援してほしいという願いが込められています。また、「ナマーラ」は、北海道弁で「すごい」等の意味の「なまら」に由来しています。「なまら」は、道内外で認知されている言葉であるとともに、「ブラインドサッカー選手のプレーのすごさ」を表現することもできると考え、「ナマーラ北海道」というチーム名にしました。

現在は、10名の選手が所属し、次のような理念に基づき活動しています。

◆ナマーラ北海道活動理念

BLIND PRIDE～この音を信じる～

- ブラインドサッカーを通じ、健常者と障がい者が支えあう共存社会を実現
- スポーツイベント等の地域交流を通じ、障がい者スポーツの普及啓発を実現
- 障がい者スポーツ関係団体として、他の競技団体との連携を図る

3 ブラインドサッカーとは

ブラインドサッカーについて、簡単に説明します。フットサルをイメージしていただくと分かりやすいのではないのでしょうか。

1チームは4人のフィールドプレーヤーとゴールキーパーで構成されます。ゴールキーパーは晴眼（視覚障がいのない選手）、または弱視の選手がつとめますが、フィールドプレーヤーは視覚障がいのある選手でなければなりません。

フィールドプレーヤーは個々の見え方による有利不利をなくすため、アイマスク（目隠し）着用の義務があり、視覚を遮断した状態でプレーします。チームにはフィールドプレーヤーの目の代わりとなる「ガイド」と呼ばれるメンバーがいて、相手ゴールの裏に立ち、ゴールまでの距離や角度などの情報を声や音で伝える役割を担います。

ボールは、中に鉛が仕込まれた特製のボールで、転がると「シャカシャカ」と音が鳴ります。選手はボールの音やガイドの声などを頼りにプレーしますが、想像以上に激しく、スピーディーなプレーに驚かされるはずです。

周囲の音声に耳を傾ける選手を妨げないように、観客にはプレー中、静寂が求められます。ただし、得点が決まったときは大きな歓声で選手を称えることができます。このメリハリある観戦スタイルもまた、ブラインドサッカーの醍醐味と言えます。



ブラインドサッカーの試合の様子

4 ブラインドサッカーの魅力

ブラインドサッカーの魅力について、NPO法人日本ブラインドサッカー協会のホームページには、次のように掲載されています。

「ブラインドサッカーは自由をくれるスポーツだ。」
ブラインドサッカーについて問われると、選手達は異口同音にそう答えます。
これまでの視覚障がい者スポーツでは、視覚障害の度合いが重いほど（視力が弱いほど）、動く範囲を限定し、味方や相手と接触することがないように安全性が配慮されていました。
しかし、ブラインドサッカーでは、選手は自分の考えで判断し、ピッチを自由に駆け巡ることができます。ブラインドサッカーは、視覚障がい者が日常では感じる事が難しい「動くことの自由とその喜び」を感じる機会を生み出し、彼らが一層の充実感を持った生活を送れることを実現します。（中略）トップスピードでピッチを走り、キレのあるドリブルで、狙いすましたシュートを放つ。それだけではありません。パスの正確さ、動きながらのトラップ。ディフェンスでの駆け引きや声によるコミュニケーション。そこでは、あなたの想像をはるかに超えるサッカーが展開されています。

＜特集3＞選手や競技を支える環境の充実

そして、パラリンピックや世界選手権などの国際大会も盛んであり、日本も徐々にレベルアップしています。自国開催となり東京2020パラリンピックに向けて、国内合宿や海外遠征を重ね、メダル獲得を目指しています。

5 練習について

選手は、平日は、あん摩・はり・きゅう師などの仕事をしながら、週末に、特別支援学校や札幌市の体育館をお借りして、練習を行っています。ブラインドサッカーは、年々個々のレベルが上がっているため、最近では、個々の技術の向上とともに、チーム戦術をより細かく浸透させることを徹底しています。

2019年シーズンは、「ブラインドサッカー北日本リーグ」に参戦しましたが、戦績は、2勝2敗でグループ2位という結果でした。また、「第18回アクサブレイブカップ ブラインドサッカー日本選手権」は、1勝1敗1分けて、グループ3位となり、予選リーグ敗退という結果でした。

2020年シーズンは、チームとして結果を残すとともに、オリンピック・パラリンピックの熱を消さない、持続させていけるように、他団体にも協力を仰ぎ、さらなる発展を目指してまいります。

6 障がい者のスポーツを通じた社会参加について

今年は、東京2020パラリンピックが開催されます。個人的にも、非常に楽しみであるとともに、可能な限り、ナマラ北海道としても盛り上げていきたいと思っています。ただ、一過性の盛り上がりにならないようにという不安もあります。そういった意味では、これまで、「オモツタプロジェクト」（道内の小・中学生を対象にしたブラインドサッカーの体験会です。体験を通して、「相手を思いやることの大切さ」、「伝えることの大切さ」の啓発をねらいとしていました。）等を通して、道内多くの市町村で、ブラインドサッカーの理解啓発を行ってきましたし、パラスポーツのイベントにも積極的に参加させていただき、サッカー教室も開催してきました。その際には、私が所属していた北海道コンサドーレ札幌にも協力をさせていただきました。

私は、ナマラ北海道の運営に携わることで、視覚障がい者に限らず、障がいのある人がスポーツをすることができる場がないことこそが、障がいであると考えようになりました。目が見えない、手や足が不自由であるといったことではなく、出かけたり、スポーツをしたりといったことがスムーズにいかないことこそが社会的な障壁となるのです。

パラリンピックを通して、ブラインドサッカーだけでなく、様々なスポーツが世の中に知られ、好きなときに好きなことができる環境が、この北海道においても、より充実されていくことを願っています。そういう場を作れるように、ナマラ北海道としても発信していきたいと思っておりますし、パラリンピック開催後に、そのような動きを加速できればと考えています。

健常者と障がい者の相互理解や共生社会ということが、社会で話題になってきています。私は、障がい者が、スポーツを通して、社会参加し、より多くの人とのつながりを持つことが、双方の理解を深めるために、とても重要なことだと考えています。そして、将来は、「健常者」、「障がい者」といった言葉がなくなっているような良い社会になってほしいと願っています。

北海道コンサドーレ札幌は、選手による道内の特別支援学校の訪問も行っています。地域のプロスポーツクラブが、そのような社会の実現のために、力を発揮しようとしていることに、期待をしていますし、私も、ナマラ北海道の運営やブラインドサッカーの活動を通して、共生社会の実現に少しでも貢献していきたいと思っています。



アダプテッド・スポーツの更なる普及を目指して

北海道教育大学岩見沢校准教授
アダプテッド・スポーツ研究室 大山 祐太

1 はじめに

「アダプテッド・スポーツ」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。誰もが楽しむことができるよう、ルールや用具を実践者の状態に適合させた（=Adapted）スポーツの総称で、近年、「障がい者スポーツ」に代わる言葉として用いられるようになってきました。人がスポーツに合わせるのではなく、スポーツ側を人に合わせて修正するという方法論的概念で、障がい者だけを想定するのではなく、小さな子供や高齢者、体力の低い者など、様々な人がスポーツに親しむことができるように「どんな工夫をすればよいか」考えるものです（図1）。

アダプテッド・スポーツが浸透することは、スポーツ分野の隆盛のみならず、共生社会の実現に大きく寄与しうると考えます。今回は、北海道教育大学岩見沢校における様々な取り組みを紹介し、その意義や今後の展望について考察したいと思います。

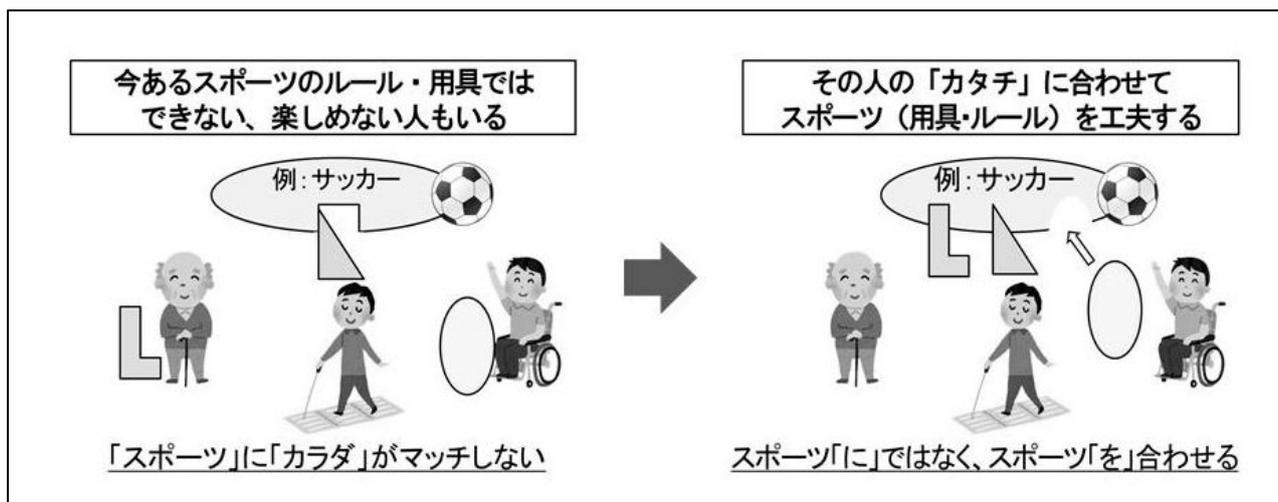


図1 アダプテッド・スポーツのイメージ

2 アダプテッド・スポーツで障がい理解教育

昨今、多くの学校が障がい理解教育やパラリンピック教育に取り組んでいますが、人・物といった教育資源の量や質は地域・学校によって異なります。例えば、大都市ではパラリンピックに関するイベントが多く開催されていますし、障がい者のスポーツチームも多く存在するので、日常生活で「知る」「体験する」「観る」に恵まれているでしょうし、学校も関連団体から協力を得やすいかもしれません。では、道内のへき地・小規模都市ではどうでしょうか。本学では、道内教育機関からの要請を受け、アダプテッド・スポーツに関する出前授業を学生と共に積極的に行っています。

内容は授業目的に応じて修正しますが、基本的には2単位時間連続して行い、1) 障がい概念の理解（約10分）、2) アダプテッド・スポーツの考え方の理解（約15分）、3) スポーツ体験（約60分：5競技～8競技）、という構成とし、児童生徒が理解しやすいようにイメージ図や写真を用いて説明しています。特に、障がいとは環境との兼ね合いのなかで困る状態である点について例を挙げな

＜特集4＞選手や競技を支える環境の充実

がら丁寧に解説し、困難を抱えている側面を強調するのではなく、環境を整えれば「できるが増え」「困るが減る」ことを強調しています。その後、実際に車いす競技やブラインド競技などを体験させ、不自由さがあっても工夫によってスポーツを楽しめることを学習してもらいます。授業後は、アンケートや感想文の分析を通して授業成果の検討も行っています。



アダプテッド・スポーツ授業の様子

3 “Sports for all” のイベント開催

また、万人へのスポーツ文化の振興を目指すという観点で、一般市民を対象とした様々なイベントを開催しています。代表的なイベントの一つが「アダスポ！岩見沢」で、車いすフェンシングや車いすラグビーといったパラリンピック競技をはじめ、アンプティサッカー、スポーツ吹き矢など、約10種類のスポーツを無料で体験できるイベントです。大学教員と学生、自治体職員、賛同した民間企業の職員が実行委員会を組んで運営に当たっており、毎年500人～1,000人の来場実績があります。スポーツ体験の他にも、車いすユーザーのファッションショーや、ロボット技術を含む高度な支援装置・装具の開発者、使用者による講演、道内プロスポーツ団体とパラアスリートのディスカッションなど、今後のスポーツ振興に向けた様々な企画も盛り込んでいます。また、近隣福祉施設による飲食物の販売や、託児コーナーと授乳室の設置、手話通訳の配備など、誰もが一日通して過ごしやすいような配慮がなされています。



「アダスポ！岩見沢」の様子

4 つながり・協同する

他にも、車いすラグビーの公式戦や日本代表チームの合宿誘致といったアスリート支援や、市民向け講座への講師派遣など様々な取組を行っていますが、全てに共通して重要視していることは、大学が単体で行うのではなく、地域と密に連携し、全ての関係機関に利益がある構図にすることです。前述した出前授業は、障がい理解やパラ教育を行いたいという教育機関のニーズに応えつつ、学生教育や研究を行いたいという大学側のニーズにも応える、まさにウィンウィンの事業になっています。「アダスポ！岩見沢」も、2020東京オリ・パラ開催に向けて地域住民の関心を高めたい自治体、専門性を生かした地域貢献と学生教育をしたい大学、障がい者の社会参加を後押ししたいという民間企業・団体が連携し、それぞれの強みを生かしながら運営しています（図2）。専門性を有す

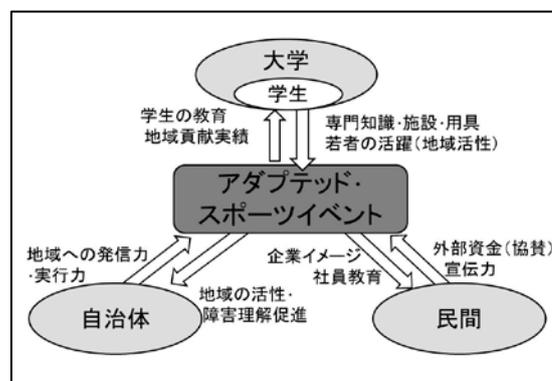


図2 各機関のニーズと相互補完の内容

＜特集4＞選手や競技を支える環境の充実

る機関・団体が繋がってゆくことで単独では難しいことができるようになり、人の交流や情報の交換もより活発に行われるため、周囲に対する発信力も高まってゆくのです。

5 北海道のアダプテッド・スポーツの展望

北海道のアダプテッド・スポーツの振興には、今後、データベースと地域間ネットワークを確立することが重要と言えます。

私の研究室には、「全盲の娘にスポーツをさせたいがどうすればよいか」、「多動な息子に適切に指導してくれるスポーツクラブはあるか」といった相談の電話がよくかかってきます。アダプテッド・スポーツなるものを扱っている研究室があることを報道や人づてに知り、とりあえず情報を仕入れたいという意図のようです。現状、ぼんやりと「余暇を楽しみたい」「何か運動したい」という場合、有益な情報を得るためにまずどこに問い合わせるべきかわからない方も多くいるわけです。また、広大な北海道においては「居住地域周辺でできるかどうか」が日常的なスポーツ実施の前提条件となります。既存施設の利便性向上や用具レンタルの仕組み作り、移動補助などの環境整備に加え、一般のスポーツ指導者が障がい者にも適切に指導できるようになることも大切です。専門性高い指導者は物理的に行き来できなくとも、情報は簡単に行き来できます。キーパーソンは恒常的存在ではなくとも、その人がもつノウハウは蓄積・継承することができます。

現在、様々な個人・団体が、情報の集約と蓄積、ネットワークの構築に向けて活動しています。北海道の障がい者スポーツ振興における主要機関である「(公財)北海道障がい者スポーツ協会」は、道内の様々な競技大会やスポーツ教室、指導者に関する情報を集約して随時ホームページで公開しています。個人的な取り組みとしては、旭川市出身のバンクーバーパラリンピック銀メダリスト「永瀬充」氏が、スポーツ関係者や興味関心のある方を対象に「北海道パラスポーツ情報」というメールマガジンを熱心に配信しています。さらに、障がい者のスポーツ・身体活動に関する研究・実践の成果共有や関係者同士の交流を目的としている「北海道アダプテッド・スポーツ研究会」も、ホームページや会員に対するメール配信などで、情報発信を行っています。当該団体は令和元年に19回の研究大会を開催しており、一般的な学会程敷居が高くなく、障がい当事者や学生、研究者、教育・福祉関係者など、幅広い層が個人の興味や熱意に基づいて参加している点が特徴的です。日本障がい者スポーツ協会公認指導者による「障がい者スポーツ指導者協議会」は、道内各地の障がい者スポーツを牽引する役割を担い続けていますし、最近では、有志学生を中心に「北海道障がい者スポーツ学生フォーラム」が開催されるなど学生の活躍もみられます。

「機関・団体を越えた」有機的ネットワークの構築までは至っておりませんが、道内の個人・団体の活動は活発化しており課題意識も共有できていると思います。目前に迫った東京パラリンピックが契機となり、オール北海道で万人に対するスポーツ環境の整備を進められたらと思います。

6 おわりに

自国開催を契機に、パラリンピックがかつてないほど盛り上がっています。しかし、世の中の関心や具体的な支援の先は「身体障がい」の、「トップ選手」ばかりではないでしょうか。

我が国は高齢化が進んでいます。高齢者が無理なくスポーツを楽しむことができれば、加齢による筋量減少や転倒事故の予防に繋がりますし、爽快感や達成感を感じられる点から生活にハリを与えることもできます。また、特に北海道においては子供の体力低下が深刻な問題となっており、子供たちが楽しく体を動かせる環境・仕組みづくりも求められます。スポーツは本質的には「豊かに生きる手段＝あそび」であり、取り組み楽しむことが第一義です。2020年以降を見据えると、障がいの有無に関わらず誰もが楽しめるよう「スポーツを人に合わせる」アダプテッド・スポーツの考え方が、スポーツ振興のみならず、多様性を受け入れる共生社会の形成に寄与しうると考えます。



共生社会の実現に向けて

北海道道立特別支援教育センター所長 小原直哉

1 はじめに

本特集は、「2020年のオリンピック・パラリンピックの開催を契機として、共生社会の形成を目指した特別支援教育の推進と充実に向けて、現役選手とその家族の思いや、選手や競技を支える活動に取り組んでいる、道内の特別支援学校及び関係団体の取組を紹介することにより、特別支援教育に関する理解・啓発を図る。」ことを目的に作成しました。本特集にご寄稿いただいた皆様、インタビューにご対応いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

さて、本特集をお読みになった皆様は、どのようなことをお感じになったのでしょうか。私は、寄稿文やインタビュー内容を読み、「多くの発見」と「理解の深まり」を与えていただいたと感じております。本稿では、そのいくつかを紹介させていただきます。

2 競技における平等

皆様ご存じのとおり、パラリンピックには、各競技によって障がいの状態による「クラス分け」が設定されています。日本パラ陸上競技連盟のホームページには、クラス分けについて次のような内容で掲載されています。図1の「クラス分け」はその一部です。

障がい者スポーツでよく耳にするものに、「クラス分け＝クラシフィケーション」があります。ひとくちに「障がい」と言っても、腕や脚などの身体、または視覚や知的発達など、障がいのある部位や種類はさまざまです。また、同じ障がいでも、その程度は人それぞれ異なります。「クラス分け」は個々の障がい競技に及ぼす影響をできるだけ小さくし、平等に競い合うために必要な制度です。陸上競技でも障がいごとにクラスを細かく分け、競技を行っています。

■ クラス分けのイメージ図

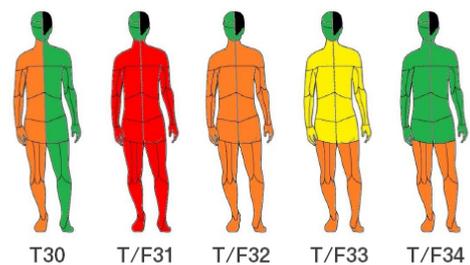


図1 クラス分け（日本パラ陸上競技連盟のホームページから）

掲載内容に「平等に競い合うために必要な制度」とある考え方は、障がいのある方々のスポーツに限ったものではなく、レスリングや柔道などの「体重別で競い合う競技」も同様の考え方で階級が設定されていると考えます。体格差に配慮した競技は、平等に「持てる力」や「身に付けた技術」を最大限発揮して競い合うものと改めて感じました。

この点においては、北海道教育大学岩見沢校准教授アダプテッド・スポーツ研究室の大山祐太氏の寄稿文にある「アダプテッド・スポーツ」の考え方が大変参考となりました。

3 共有することの意味

次に「理解を深められたこと」は、「共有すること」についてです。パラアスリートの方へのインタビューや支援する団体の方々のお考えに共通するのが「感動の共有」「目的の共有」「生活場面の共有」であると感じました。「アスリートの方は観客から応援されて力」をもらい、「観客はアスリートのパフォーマンス」に感動する。これらについて私は、「一体感」とも表現されますが、「目的」や「今生活している空間、生活場面」の共有と感じました。

パラスポーツの観戦は、限られた時間や空間ですが、共生社会の実現に向けた考え方である「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」の形成につながる体験となるのではないのでしょうか。

パラスポーツでの「感動の共有」「目的の共有」「生活場面の共有」が、日常生活に広く浸透することを願っています。

4 理解のためのきっかけ

特別支援教育では、障がいのある児童生徒と障がいのない児童生徒がともに学び合う「交流及び共同学習」という考え方があります。この学習を幼児段階、小学校段階、中学校段階、高等学校段階と継続的に実施していくことで、障がいのある人への「心のバリア」が軽減されると考えています。本特集の鷹栖養護学校の取組やNPO法人セカンドサポートの取組は、「スポーツの実施における物理的な環境」や「参観することによる心理的環境」に働きかけるものであり、共生社会の実現に向けた「きっかけづくり」と捉えることができます。これらの取組を積み重ねることによって「社会的なバリア」の軽減に結びつくと感じました。

さて、皆さんは、どんなことから始められるでしょうか。また、始めているでしょうか。

ここで私の経験の一つをご紹介します。私のきっかけは、「広めよう障がい者スポーツの輪」をスローガンに平成24年8月21日に行われた「ナマール 北海道」のデビュー戦になります。写真に「16 HAGI」とありますように、当日は芳賀理事長も選手としても参加されていました。



パラスポーツの観戦や各種団体への支援等々は、身の回りにはいろいろなきっかけがあると思います。本特集で興味をお持ちになった皆さんも「一歩」踏み出してみてもいいのではないでしょうか。

5 おわりに

今回の特集は、パラスポーツを中心に紹介しましたが、特別支援学校では、芸術の分野でも多く活躍しています。これからの社会においては、スポーツや芸術文化活動をとおして「心のバリア」が一層軽減され、誰もが住みやすい「共生社会の実現」が図られることを願っております。

結びに、本特集の作成にご協力いただきました方々に改めて感謝申し上げます。

編集後記

「特別支援教育ほっかいどう」第25号は、「スポーツを通じた障がい者の自立と社会参加の充実に向けて」～2020年オリンピック・パラリンピック開催を契機として～という特集題の下、「夢の実現に向けて～現役選手とその家族、関係者から～」、「選手や競技を支える環境の充実」2つのテーマから、現役選手へのインタビューや、各学校及び地域の取組を紹介しました。

今回のインタビューを通して、現役選手の競技に対する思いや東京パラリンピックが開催されることへの思いはもとより、これまで選手を支えてきた保護者や指導者のこれからの願いについても紹介することができました。

また、パラリンピックだけでなく、障がい者スポーツを取り巻く環境が、様々な人の力で変わろうとしていることを実感することができました。

当センターといたしましても、皆様方の御示唆を頂きながら、北海道の特別支援教育の充実を目指し、様々な活動を展開してまいりますので、今後ともよろしく願いいたします。

最後になりましたが、玉稿を頂きました皆様に厚くお礼申し上げます。

特別支援教育ほっかいどう第25号

発行：令和2年3月

編集：北海道立特別支援教育センター

北海道札幌市中央区円山西町2丁目1番1号

T E L 011-612-6211（代表） F A X 011-612-6213

E-mail tokucen@hokkaido-c.ed.jp

U R L <http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/>

Twitter https://twitter.com/pref_tokucen



発行者：北海道立特別支援教育センター所長 小原直哉